

技能五輪国際大会への挑戦 (選手育成について)

(株)千代田設備 両川営業所
第6事業課 石井 敏明



清水選手（右）、石井EX国際大会で競技終了時

1. 技能五輪国際大会について

技能五輪国際大会(以下「国際大会」)は、世界各地の若手技能者が仕事の技能を競う大会である。

この大会は、2年に一度のペースで開催され、参加する選手の年齢も22歳以

下(一部職種によっては25歳以下)と決められおり、各国1職種につき1名または1組が参加できる。職種数は、開催地によって異なるが、2015年に開催されたサンパウロ大会では50職種で、日本は40職種に参加した。私はエキスパー

石井 敏明氏 略歴

昭和35年生まれ 昭和57年(株)千代田設備入社、現・第2工事部部长。

新潟市管工事業協同組合技術・教育委員会。

技能五輪国際大会配管職種で第39回(日本・静岡県大会)、第40回(カナダ・カルガリー大会)、第41回(イギリス・ロンドン大会)、第42回(ドイツ・ライプツィヒ大会)、第43回(ブラジル・サンパウロ大会)と5大会連続でエキスパート(競技委員)を務める。

自らは平成5年第12回技能グランプリ大会優勝(労働大臣賞受賞)。

ト(以下「EX」)として、日本代表選手の清水龍二氏と「配管職種」(Plumbing& Heating15)に参加し、銅メダルを獲得することができた。

2. 選手選抜

国際大会に出場する日本代表選手の選考は、国際大会が開催される前の年の技能五輪全国大会(以下「全国大会」)で行われる。ここで、国際大会の職種別参加資格を満たした優勝者が日本代表としての権利を得ることになる。2017年開催のアブダビ大会は、2016年10月21～24日に山形県で開催された全国大会の結果で選出された。

3. 国際大会でのエキスパートの役割

EXは各国から選出され、その役割は、国際大会において大会の運営、安全対策、競技課題の作成、評価などである。この他、選手に作業内容や会議の決定事項を伝える役割でもある。

以前の大会では、競技中、選手と接触ができなかったこともあったが、現在では評価の内容(測定箇所、ポイント、できばえ)を選手に伝えることができるようになった。

このことから選手の心のケアやメンタル面のサポートを行うことができる。私はこれがEXのもっとも重要な役割と思っている。

4. 評価やルール、大会運営

以前は国と国との競い合いの要素が大きく、ホスト国が優位な評価結果になる傾向が見受けられたとの風評もあった。しかし、私が初めて参加した2007年開催の静岡大会以降、倫理規定やルールのもと運営されているためか、多少のトラブルなどはあるものの、ホスト国が優位になることは見受けられない。

静岡大会の配管職種においては、チーフエキスパートがしっかりチームをまとめていたこともあり、フレンドリーな雰囲気ですべての大会を終えることができた。

国際大会の内容、競技課題の情報はどのように得るのかというと、初参加の静岡大会のときは、ホームページなどがなく、情報量は極めて少なかったが、公式ホームページが利用できるようになると、国際大会のルールや、職種ごとの職種定義(TD)、インフラリスト(IR)材料、工具(メーカー)など重要な情報を得ることができるようになった。ただし、英文での提供のため多少、大変なこともあるが、そこは努力すれば、何とかなることである。

5. 国際大会の選手指導と育成

EXとして選手指導を行うにあたって、最初に行っていることは、全国大会と国際大会の違いを理解するまで繰り返し教えることである。教える内容は、国

際大会に挑戦するための気持ちと、全国大会との材料、工具、競技内容の違いなどである。特に「時間」に関しては、国際大会は全国大会の倍以上の競技時間となっており、日程も全国大会が2日に対して4日と長期である。時間内に作品が完成しなければ評価対象にはならない。したがって、選手には時間の管理を徹底的に覚えさせる。そして、時間内に作品をモジュール（作業区分）ごとに完成させる練習を繰り返し訓練するのである。

また、選手は外国という環境の中、見知らぬ人、言語などに戸惑いを抱き、そのことが多大なプレッシャーとなる。この選手のプレッシャーを取り除くことが配管施工技術、技能の指導よりも難しいところである。

技術、技能は、普段から使用しているパイプの加工、接合である。衛生器具等の据付は組み立てと取付けである。世界共通では無いものの基本的な大差はない。ただ、黒ガス管の接合にはネジ、ガス溶接の2通りあり、ガス溶接接合は日本の水道工事店ではなじみのない作業のため練習の必要がある。2015年のサンパウロ大会ではガス溶接接合は無かったが、新しい技術、技能が取り入れられていた。国内大会に参加した選手なら基本の練習をしているので、技能の応用力を身に付ければよいだけである。今までの技能で十分挑戦できる。国際大会への挑

戦は選手にとって1回きりのチャンスである。若い人はぜひ挑戦してほしい。挑戦することで人生観が変わると思う。

国際大会の競技課題の図面発表は大会の約3か月前である。それまでは基本作業の銅管、塩ビ管、ポリエチレン管、鋼管の)配管や曲げ加工(加熱による曲げ加工はしない)の繰り返しと前回大会の作品の練習をする。図面が公表されてもすぐに大会の作品の練習に取り掛かれるわけではない。やるべきことは、①英文で発表になった図面を翻訳し内容を理解する②開催国で提供される材料、工具の情報をWeb上から確認し日本で入手可能か、または日本にも代用できるものがあるのか、全くないのかなどを調べる③本番までの練習方法(モジュールごとの時間割り等)を大筋決める、などである。

これが、私の行っている選手指導と育成方法である。特別変わった方法はしておらず、いたって普通、誰もが知っている指導方法だと思う。ただ、知っているだけではダメ、実行しなければ何にも始まらない。何でもとにかくやること。これが国際大会への挑戦である。

6. 国内大会（技能五輪全国大会）

私が勤務する会社の国内大会への選手選出と指導・育成の方法を紹介する。

会社では、大会には年齢制限があるため、選考対象者を工業高校を卒業したば



大会に向けて厳しく指導

かりの新卒者と前年度入社したすべての社員としている。工業高校卒業の社員は少ないため、入社1年以内の未経験者を育成し、地方で開催される技能五輪予選に参加することから始まる。

つまり、私たちの選手選考、育成は専門知識のない社会人としてスタートしたばかりの普通の若者をゼロから育てていくことになる。そのため、はじめの指導育成は、社会人としてのマナーを徹底して教え込むことから始まる。その内容はいたってシンプルで、「あいさつ、コミュニケーション、感謝の気持、我慢、忍耐力」など「心・技・体」の「心」の部分から教えるのである。技能大会への参加は大会に参加するのが目的でなく、弊社創業者の理念でもある『人生を生きるための人間性を磨く』ことを重点に置いている。

今まで大会に参加した選手すべてに共通することは、成績はいろいろあるものの参加した選手すべてが、大会を境に仕



「楽しくやろう」をモットーに

事に向かう心構えが変わっており、目は輝き、行動に自信が付いている。参加させてよかったと実感するときでもある。

新入社員は、1週間程度の新人研修を行い、その後は現場担当者と一緒に現場に就き、工事の基本や施工のノウハウを教わる。研修内容については現場担当者に一任している。こうした現場中心の考え方が国内大会の練習へスムーズに入っていけるのである。

弊社の育成の強みは、大会経験者が多く在籍していることである。迷った時、疑問が生じた時など、一緒に考えてくれる先輩が多くいることである。指導については、指導者の今までの体験、経験などを基に個別に指導している。同じ性格、体格、考えを持った選手や指導者はいない。そのため、強制的に教えること

はしない。個人の考え、工夫、改善など自主性を尊重した方法で行っている。アドバイスとヒントを伝えるだけである。

後は、施工時間の管理、完成品の品質の管理、つまりPDCAサイクル（管理業務を円滑に進める手法の一つ）が練習の基本となっている。

これが弊社の練習の流れであり、育成方法である。

7. 全国大会の現状

近年、全国大会参加者を見てみると、工業高校設備科、専門学校、短期大学の生徒の参加が多くなってきている。

彼らは、設備の専門知識を有するプロの指導者のもとで学び、学科と実技を習得できる環境の学校から参加するため、私たちにとって大きな脅威になっている。

8. 最後に

私の指導は、自主性を重視した練習を取り入れ、けじめのある行動と忍耐力を徹底させる点で、とても厳しいと思っている。

また、練習でも本番でも、選手に「楽しくやろう！」とよく話すこと。これが、「がんばれ！」という言葉より一番力が出る言葉だと思っている。

特に大舞台になると、大きなプレッシャーが選手を襲う。「楽しんでい



サンパウロ表彰式

る？」と聞くまでもなく選手は緊張と不安の中、自分を見失ったまま競技に突入してしまい、ミス、トラブルを発生させ、結果として実力を出せなかったことが多くある。参加の全選手が同じ立場で、技術ではイーブンなのに、なぜこんなに心にプレッシャーを感じてしまうのか。適度のプレッシャーは必要だと思うが多すぎるのはダメである。チャンスを成功で終わらせる育成方法にすることが、今後も私の課題と思っている。

最後に、技能大会の大舞台を経験することで、選手自身の人間性、考え方、志が大きくなり、自分自身の今後の人生や仕事の上でのターニングポイントとなると信じている。

参加資格のある若い人たちには、職種はいろいろあるのでぜひとも技能大会に挑戦してほしい。

（出典：きゅうすい工事 Vol.17 No 2 2016.夏季号）